

校長メッセージ ～合言葉は「子どもに軸足！」～

東長良中学校 丹羽

「家族の信頼感」

全国で変異株の猛威により、新型コロナウイルスの新規感染者数が急激に増加してきた中、岐阜県においても、8月以降感染者数が急増し、1日あたりの感染者数が過去最多を記録するなどして、国の緊急事態措置が9月30日（木）まで延長されました。これ以上の感染拡大を食い止めるため、マスク着用や手指消毒など、基本的な感染防止対策を万全にしていくとともに、感染リスクが高まる行動は控えなければなりません。おのずと外出機会が減り、お家で家族と過ごす時間が増えるのではないのでしょうか。

さて今号では、「子どもたちを支える家庭教育7つのポイント」の中から③「家族の信頼感」について考えます。

子どもたちは、「あのね、今日ね、〇〇さんがさあ」「ねえ、ねえ、今日ネットニュースでさあ」などと話しかけてきます。これは、自分の身の回りに起こったことや感じたことを伝えて、同じように喜んだり、悲しんだりしてほしいと思っている心の表れです。こうした互いの体験の共有が、家族の信頼感（絆）を強める一番の要素となります。しかし、そうしたことは分かっている、仕事から疲れて帰ってきて、ほっと一息ついて好きなテレビ番組をつけたり、新聞を広げたりしたときに、子どもからあれこれ話しかけられると、「ちょっと待って」とか「あとでな」といってしまいがちです。それまでの仕事モードからスイッチが切り替わっていない場合など、そうした身近な話に頭がついていかなくて、そんな話はたいして重要ではないだろうというのが、内心の正直な気持ちであったりもします。しかし、子どもにとって話したい気持ちは「今この時」のものであり、「あとで」はないのです。それがいつも「あとで」と言われると、子どもは「もう、話しかけても無駄だ」と思い、話すことをあきらめてしまいます。そうなるから、何かが起こったときだけ親の都合で「さあ、話してごらん」といっても遅いのです。一度、閉ざしてしまった子どもの心の扉を開けることは容易ではありません。「どうせ言っても聞いてくれない」と子どもが思わないうちに、普段からささいなことであっても、子どもたちの言葉に丁寧に耳を傾け、誠意ある対話をするよう心がけたいものです。

また、親自身にストレスがたまっているとき、気がつくともどもを頭ごなしに怒鳴っていることがあります。ちょっとしたことで「だからいつも言っているでしょう」とか「全くおまえって子は」など、頭ごなしに子どもを否定するような言葉をあびせたことはないでしょうか。子どもに対してこちらの意図を理解してほしいと願うとき、しかり方にも自ずとそれなりの工夫が必要となります。それは、子どもの長所はきちんと押さえておくということです。「あなたはいい子。わたしはあなたのことを愛しています。」というメッセージをちゃんと送った上で、でも、この部分はこうした方がいいよと伝えたいものです。子どもの人格を否定するような一方的な言い方では、反発はされても親の意図は全く伝わりません。また、「おまえはダメだ」といった陳腐な言葉をつかったのでは、親に対する敬意をもてと言う方が無理な話です。そして、向き合って叱るとき、ちゃんと子どもに逃げ道を作ってあげることも大切です。子どもには子どもなりのプライドがありますから、そこはちゃんと押さえた上で、こうしてほしいという言い方が効果的なのです。最も効果の大きい叱り方は、子どもにやる気を起こさせる言い方です。そのためには、こうすることによってこんないいことがあるという展望を示すことが欠かせません。

子どもは、小さいころから一人の人間として自分の人格を大事にされたいと強く願っています。自分と対等の人格を持った一人の人間として、尊重して接するとともに、対等の大人に対しては絶対に言わないような言葉を、我が子にもかけないように心がけたいものです。